

随想 定年退官を迎えて

本郷 逕子

ありがとうございます。本郷でございます。ただ今ご紹介戴きましたように、私は来年の3月で定年退官いたします。皆様はもうすでにご存知のように、私は「単に一人の日本人教師であり続けた」というだけのことでして、このように、大勢の研究者の皆様の前で、この高いところからお話するようなこともない、とご辞退申し上げたのですが、この日本言語文化学会を創設された水谷信子先生、平田悦朗先生も、ご退官の折には、退官記念講演をなさったし、恒例に従うようにとのことでございました。それで、何をお話ししようかと、いろいろ考えましたあげく、大層、不遜な、また、おこがましいこととは存じますが、自分が歩んできた、長い道をたどりながら、折々感じた事柄や、学んだことをいくつかご紹介してみようかと存じます。ものの見方には、いろいろあるものだと感じていただけるようなものをいくつかご紹介できたら嬉しく存じます。

日本が第二次世界大戦に参戦したのは、昭和16年、1941年で、その時、私は6歳。終戦を迎えたのは10歳の時でした。45年3月の東京大空襲の頃には東京にいましたが、幸い、私の家は戦火を免れました。その後、空襲も激しさを増してまいり、間もなく埼玉県に疎開いたしました。そこで通った小学校、当時は、国民学校とよばれていましたが、そこで、今考えてみれば、外国人に対する偏見とも似た感情で見られるという経験をいたしました。「ソカイ、ソカイ」と呼ばれ、つまり東京からの疎開者ということで、よそ者として見られ、口を開けば、東京弁を話して威張っているとか、おかしいと言って笑われたり、いじめられた時の、惨めな気持ちを今でも生々しく覚えております。疎開していた期間はほんの5ヶ月ほどでしたが、大変長く感じられました。私は、まだ子供でしたから、短期間でほとんど完全といえるほどの‘埼玉弁’で話せるようになっておりましたが、それでも、いじめは相変わらずのことでした。ある時、音楽の時間に歌の伴奏をピアノで弾かせられたことがあり、私は幸いに小さい頃からピアノの稽古をしていたので、一応弾けました。この時以来、学友の態度は一変し、尊敬の念のこもった目で見ら

れた記憶があります。芸は身をたすくとはまさにこのことで、いじめはかなり少なくなりました。

終戦後、ほとんど直ぐに東京へもどりました。爆撃の後の焼け跡、食糧難、物資不足、ヤミ市、子供の目にも悲惨な状況でした。それでも、近所の元の学校に戻ることができました。名前が「国民学校」から「小学校」に変わった時は、子供心になぜか屈辱的に感じました。多分、小という言葉が、「小さい」子というイメージだったのでしょう。「国民」から「小さい」子への転換はいやでした。学校での授業開始は、教科書を開いて先生のおっしゃる個所を、習字の墨で塗りつぶす作業から始まりました。何日も何日もかかる作業でした。意味は良くは理解できませんでしたが、その時まで、丁寧に本にお辞儀をしてから開き、大切に大切に使っていた教科書の多くの部分を墨で塗りつぶす。それも、絶対に、下を書いてあるものが見えなくなるように塗りつぶすというのですから、その時の感情は、半分は子供のことで少し面白い作業でしたが、何故かと考えたときに浮かんた感情は、屈辱的というのが一番、ふさわしいと思います。屈辱的と言えば、進駐軍のアメリカ兵に学校から帰る途中、道を通っている人々が総て止められ、列を作って並び、服の中にDDTを散布されたこと。また、総ての学校に必ずあった奉安殿、つまり天皇皇后の写真が入れてある社で、儀式の折に校長先生が、恭しく重い扉を開けて、最敬礼をする。そうした儀式中、生徒は深深と頭を下げて写真を見ることなど絶対に許されず、この奉安殿の前を通るときには、必ずお辞儀をするというなんとも畏れ多いものでした。その奉安殿が、ある朝学校へ行ってみると、陰も形もなくなっていました。一夜にして消えてしまったわけです。何十年もたってから、聞いたところによると、大きな穴を掘って、奉安殿をすっぽりと埋めてしまい、跡形なく平地にしたのだと言うのですが、これの信憑性はよく分かりません。こうして、日本の中には、それまでの価値観を根本から覆すようなことが、小学生の私にさえ何か変だと思わせるような矛盾が充満し始めました。

やがて私も中学に進みました。女子学院は昔から英語教育が盛んで、アメリカから宣教師が英語教師としていらっしやっていました。お年を召した白髪のアメリカ人の先生から、毎週、英語の呪文、それも長い長い呪文を暗記させられました。最後が「エイメン」で終わる呪文でしたが、

日本語訳ありませんし、とにかく耳で聞いたものを口で真似るわけで、意味はさっぱりわかりませんでしたし、「エイメン」が来ると、「ああ、終わったな」と思うだけでした。間もなく、呪文の全文が言えるようになり、「エイメン」が来て終わりにになると、その先生がお祈りの形で両手を組み、生徒にも手を組むように指示なさり、ひょっとすると、「エイメン」は、「アーメン」かな？ 長さから言っても、「主の祈り」かな？ と思ったわけです。ミッション・スクールですから、当然、主の祈りも毎日の礼拝のときに日本語で唱えます。そのうちに、高校生になった頃には、英語と日本語が、ほとんど分かるようになりました。英語も日本語も文語的な古い表現があつて、日常に使えるようなものではありませんでしたが、それでも、感情を込めて、どちらの言葉でも主の祈りを唱えることができるのは素晴らしいと思いました。語学教育の中に、ただ、ひたすら暗記させるものがありますが、この方法も捨てたものではないと思います。

私にとって英語の勉強の方向を決めるのに一番重要な存在だった先生は、中学二年のときにアメリカから赴任して来られたアルマ・ワイエットという若い、美しい先生でした。最近のようにどこを見回しても西洋人が多いというような時代ではありませんでしたから、このワイエット先生の存在は、もう大変な憧れで見られたものでした。私のようにおっちょこちょいな中二の女の子にとっては、今時のアイドル達を追っかける若者の熱気を上回るような憧れようでした。とにかく、一言、二言でよいから話したいという強い気持ちで、英語を必死に勉強しました。先生の宿舎にまで、電話をかけるというようなこともしたので、ストーカーもいいところです。それでも先生はいつも嫌な顔もなさらず、素晴らしい笑顔で相手をしてくださいました。今は英語の学習のための手段はたくさんあります。ラジオ、テレビ、ビデオ、カセットテープ、CD、それに極めつけは、ホームステイなどさえありますし、巷には英会話の学校や塾が山ほどあります。当時とは申しますと、テープなどなし。ビデオ、テレビなどもなし。十五分ほどの、「カムカム エブリバーデー」という歌で始まる英会話のプログラムがあるくらいでした。女子学院の日本人の英語の先生の何人かは、留学経験もおありで、それはそれは、美しい英語をお話しになりました。それでも、英語を勉強したいと思う学生にとって

は、決して十分ではなく、英語を聞く機会を夢中になって探しました。常に聞けたのは、米軍の(進駐軍)放送でした。もちろん言っていることなど分かってはあきません。けれども、家にいる限りラジオをつけっぱなしにしておりました。私と年齢も大分違う兄は、国内ではありましたが従軍の体験もあり、私が、旧敵国の放送など嬉しそうに聞いているのが不愉快であったようです。私は末っ子でもありますし、そんなことはおかまいなしで、音楽の多い米軍の放送を常に聴いておりました。私の特に好きだったのが、4時半から30分の、アメリカのウェスタンミュージックの番組で、学校から急いで帰り、家のそばの中華そば屋からラーメンを届けさせ、食べながら、ウェスタンを聴くというのが日課でした。御蔭で、大分太りました。これは、高校時代だったと思います。この FEN のラジオ番組から流れる英語のほかには、アメリカ映画がありました。同じ映画を1日に4回も続けて見たなどということも、まれなことではありませんでした。それほど、生の英語を聞くチャンスはなかったのです。大変良かったと思うのは、映画のシナリオを、総て、英語と日本語で書いてある冊子を本屋で売っていたことです。これを何度も読んで、口に出して練習し、映画を見に行き、また本を読んで映画を見に行きということを繰り返しました。こうすることで、高校時代は過ぎていきました。

つまり、他の必要な勉強すべき科目はかなりおろそかになっていました。また、英語の勉強ばかりでなく、日本の小説を濫読しておりました。濫読という言葉がぴったりの読み方でした。週3〜4回は徹夜をしました。米軍の放送を聴き、映画のシナリオを読み、英語で日記をつけ、小説を読み、と勉強などする“余暇”はありませんでした。読んだものは小説ばかりではありません。哲学書、詩集、なども、こちらは勿論日本語ででしたが、読み漁りました。哲学などよく分からない難しいものも、分かったような顔をしながら読み、友人と、感想を書いたものを交換したり、宗教論を交わしたり、私にとっては、大変充実した高校時代だと思いました。ところが、高校3年になって、大学受験というものがやって来ました。計画性がまったくなく、理数科に弱かった私は、新しくできる、聖路加病院付属の、看護大学に入るつもりでした。その話を母にしたところ、「あなたのように体が弱い人間に、病人のお世話などはできません。反対です。」と強く反対されました。びっくりしました。母は、末っ子の私のや

りたいことは、すべてさせてくれていたからです。しかられたことも殆どありません。この時の反対と、もう一度反対がありました。それは、中学2年のとき、ピアノを止めて、声楽を習いたいと話したときです。この時は、「とんでもない。この家の中から、鶏の首を締められたようなみっともない発声練習の音が聞こえるなどということは、とても許せません」と、今考えてみれば、あまり理の通った理由ではないのですが、怒ったり、叱ったりすることのなかった母から出たこの強い言葉で、私は声楽家になることを、即、断念いたしました。さて、聖路加に反対されたことは、私なりの出世の計画を練っていただけに、大変困りました。学友達は、着々と受験準備をはじめていましたし、私はあせるばかりでした。すると、ある日、新聞に国際基督教大学の開学の記事がのっていました。そこに書いてあった精神に甚く共鳴し、「これだ」と思い、今度は父に相談しました。父は、「人間は、開拓者精神を持って、常に進歩をめざしていなければならない」というような考えの持ち主でしたので、「まあ、良いだろう。やってみなさい」と言ってくれました。ICUの入試のためには何をやらなければならないか、全然分かりませんでしたから、私は毎日小説を読んだり、哲学書や、エッセイ集などを読んで、英語の放送を聴いてという日々を過ごしました。

運良く合格し、Language 部に入学いたしました。アドバイザーは小出詞子先生でした。入学当時は、Language と言えは英語のことしか考えず、小出先生が、日本語教育の草分けの先生などということは、お恥ずかしい話ですが、つゆ知らずでした。先生は、無理にというのではなく、じわじわと日本語教育への関心を高めてくださいました。とはいえ、無知な私は、日本語教育などという分野の存在さえ、考えてもみませんでした。しかし、それ以来英語を学ぶときにも常に日本語を同時に考えると言う習慣のようなものが、自分の内に出来上がってきました。自己流ながら、対照言語学的なものが出来上がってきたのです。英語の学習にも深みがでてきたと思います。日本語教育に関する授業もあり、金田一先生のお授業を聞きながら頭の中で、英語では、それはどう説明すればよいか、どう訳したらよいかなど考えるのが、習慣になりました。

英語に関しては、あれほど中・高と学んできて、こっそりと自分の中では、「英語はまあまあできるわ」、的な自信が、ぼろぼろと壊れていきまし

た。父が誰にともなくよく家で口にしていた「汝ら奢るなかれ！」“ということばが、常に耳に聞こえるような気がいたしました。英文学、神学、美学、栄養学、物理などの英語のお講義は何パーセントぐらいわかったのでしょうか。とても不安でした。後にウィリアム・ムーア先生に卒論指導でつくことにいたしました。ムーア先生の厳しさには皆畏れをなしていましたが、私は1年の英語の授業から、すっかりムーア先生に惹かれ、アメリカ文学とアメリカ精神について、多くを学びました。大変体格の大きな先生ですが、真に繊細な神経の持ち主で、日本でよく言う、「虫の知らせ」とか「気」の世界など、心(?)の世界について苦心して書いた作文なども、細かく読んでくださり、ご指導を受けました。この先生から、本当の意味で、「英語で考える」という習慣をつけていただいたと思います。

やがて、英語教育について、卒論を書くことにしましたが、先生はオリジナルということが一番大切とされ、英語教育の専門書を読むな、自分で考えて、工夫して、試して、軌道修正をしながら進め、自分の感性を最優先とせよ、とちょっと変わったご指導をいただきました。成蹊大学付属の小学校で英語の実習をかなり長い期間続けてやらせていただきました。私は、根が素直(!)な人間ですから、先生のお言葉通りに自分の頭で考えながら行いました。今考えてみると、ここでは、ずいぶん進んだことを勝手に考えて、行い、結果を見ることができました。この土台が、のちのち日本語教育に入った時に、どう考えていったらよいか、どういう方法が可能か考えるなど、問題に接する態度を養われたと思い、ムーア先生のお陰とありがたく思っております。成蹊での実習で自分に課した問題は、‘slow learner’をいかに指導するか、大人数制のクラスの中で、いかにしたら個人指導を行っていけるかということでした。種類の教授法や、視覚教材などを試す機会を得ました。成蹊にはとても感謝しております。日本での外国人のための英語教育熱が高まっていた時期です。1950年に始まったガリオア奨学金も大いに利用され、米国への留学者が増加しておりました。英語専攻の人々は殆どがミシガン大学へ留学され、チャールズ・フリーズ、ロバート・ラドー、ケネス・パイクなどが全盛の頃でした。服部四郎先生もパイクに学ばれたとのことでした。

私は、こうして、英語教育を主専攻に、日本語教育を副専攻にとった恵まれた環境におりました。1955年にICUで、junior year

abroad (学部3年生が1年間外国で学ぶ)受け入れのプログラムが始まり、日本語教育実習の学習者として便利な存在となりました。また、ICUでは、外国人教師の妻などが日本語を学ぶクラスもありましたので、学内での実習の場には恵まれておりました。長沼日本語学校でも実習をさせていただき、同学での先生方のご指導も受けられました。当時は、パーマー、ベルリッツによって提唱された直説法の全盛期で、母語は禁止。音声面を強調し、文法の説明などもしないと言う授業でした。こうしたいろいろな場での実習で、おおきな疑問として残ったことは、果たして、あんなゆっくりした発話を正解として認めてよいのだろうか、日本実社会では、あんなにゆっくりした発言は認められないはずだ、どうしたら自然の速度の会話教育が可能かということでした。

1957年、ICU卒業後、東京のある私立中学校の英語教師となり、卒論で考えたことを実践する機会を得ました。

ムーア先生は私の心の恩人と言えます。小出詞子先生には、日本語教育の面白さ、難しさをお教えいただきました。こうした先生方に恵まれたことは、本当にありがたいことでございます。

半年中学で教えただけで、直ぐ米国へ行きました。1957年の8月でした。因みに中学での月給は、税引き後、1万円までにはもうちょっと、という額でした。日給ではありませんよ。月給です。とにかく、1ドルが360円、ヤミドルは400円していた時代ですから、どれだけ円とドルとの差があったか、おわかりいただけると思います。米国へ留学というと、かっこよく聞こえますが、私の行ったところは、オハイオ州の本当の田舎にあるクエーカーの小さいカレッジでした。とにかく、小さいデパート、ガソリンスタンド、映画館、10セント・ショップ、ホテル、それぞれが、1軒ずつしかない町でした！それも、そこまで歩くのに学校から30分はかかるという具合でした。華やかなアメリカを夢見てきた23歳の女の子にとって、そこは地の果てでした。何故そんなところに行ったかということ、私は絶対に誰にも金銭的な迷惑をかけたくないという意志が強く、ムーア先生に相談したところ、このカレッジには、work-study プログラムというのがあって、半分仕事をし、半分勉強をすれば、経済的に独立できると教えてくださったからです。週に2日学校へ行き、3日フォードの下請工場の自動車部品製造工場で

働く。これで、経済的には全く自立していました。アメリカならではのシステムだと思います。ところが、朝4時半起床。大学食堂で急いで朝食を摂ると、大型バスが来て工場へ運ばれ、7時から3時半まで、きっちり8時間労働、疲労でクニョクニョになった体で再びバスに揺られて5時に寮へ、急いでシャワーを浴びて、今度は食堂での夕食のサーバーとしての仕事へ、という、それはそれはきつい仕事でした。私はそれほど体が強かったわけではありませんし、7月に日本で盲腸の手術をした直ぐ後の渡米で、条件はあまりよくありませんでした。それにしても驚いたことは、プロの工場の若い職工達の裕福さでした。殆ど全員がキャデラックの新車か、外国のスポーツカーなどに乗ってくるのです。車の種類で、人を量る国ですから、全く驚きでした。大変つらい仕事で、日本の両親などに、細かい報告などは心配するだろうと考えて、とてもできませんでした。でも私は、人生の中で、これほどの試練をうけていれば、世の中何も怖いものなし、という妙な自信はつきましたし、今この年になってさえ、その気持ちは抜けていません。

オハイオのカレッジについて2ヶ月余り経ったころ、東京から連絡があり、姉がお産で亡くなったという手紙がきました。大きいお腹をして横浜の港まで見送りにきてくれた直ぐ上の姉です。何ともやり切れぬ気持ちで、暗くなるまで人っ子ひとりいないフットボールのフィールドで何時間もあたりが真っ暗になるまで座っていたのを覚えています。そして寮に帰ると、寮長のおばあさん先生がいらっしゃって「可哀相に。でも私にはそういう経験がないから、あなたの気持ちがわからないの」と慰めてくれたのか何だか、私には、理解できない気持ちでした。牧野誠一先生のおっしゃる「感覚性」「共感性」「間接性」を持つ日本人とアメリカ人の感覚のギャップを感じたというか、アメリカ人と日本人の感性の違いというものを感じました。

これはちょっと違いますが、後にハーヴァードにいた頃、ある学者のお宅に招かれたことがあります。15人ほどが招かれていたお茶会でしたが、その奥様が、急に私のところにいらっしゃって、「私たちは、真珠湾のことであなた方日本人を許しますから、広島、長崎のことで私を許してくださいね。」と真剣なお顔でおっしゃいました。このとき初めて私は、ああ、真珠湾攻撃に対しての責任感を、私個人も感じるべきだったのか、

と愕然としました。また、原爆ということにたいしてもこの学者の奥様個人の問題としてとらえているのかと、初めは当惑でしたが、間もなく感銘となって私の心の中にひろがりました。これをパーティーの場で言うというのは感性の差と言えるかもしれませんが、国の為したことに対して責任感を個人個人が持つというのは、私たちには、今でもなかなかできないことではないでしょうか。アメリカの個人主義、ムーア先生がいつもいつも、おっしゃっていた Individualism という本当の意味がやっと理解できたような気がいたしました。

話が前後いたしました、1958年の1月に、婚約者がボストン大学大学院で化学の助手をしていたのを頼って、ボストンへ参りました。オハイオの田舎には耐えられなくなっていましたし、私も本格的な勉強に取り掛かりたかったからです。ボストン大学大学院教育学専攻で、音声学、アメリカン・ドラマと creative writing のコースを受講していました。この creative writing のコースは、小説、詩、ドラマ、エッセイ、論説文などを書くコースで、学生中、唯一人の外国人学生として、エッセイや論説文などを書いていました。今考えると、冷や汗ものです。若いつて、怖いもの知らずですよ。直ぐ結婚し、といってもボストン市庁舎で宣誓、登録をすませ、二人とも YELLOW と人種欄にかかれた結婚証明書を手にして帰っただけのものでした。勉強も大変でしたが、充実したものと喜んでいたところへ、体をこわし、大学院を中退せざるを得ない状態になりました。しばらく休養を取っているうちに、友人が、パートでなら大丈夫でしょう、ハーヴァードの漢和図書館で、人を探しているからといって紹介してくれました。当時の図書館長は、中国人で、A. KAIMING CHUとおっしゃる立派な学者でした。その CHU 博士に気に入られ、図書館長秘書のような役とその他種種の仕事をしておりました。中国では毛沢東が台頭してきて、アメリカ人教授たちは、伝統的中国研究から、共産主義、毛沢東と、大変燃えていた時期でした。CHU 先生は、毛沢東は確かに素晴らしい識者であるが、中国を統一するなどの器でない。今に毛沢東は退く、だから、共産主義関係の本など買う必要はないと、私にこっそりとおっしゃっていました。アメリカ人の教授達が図書館長のところに、そうした関係の書物を注文にいらっしゃると、はい、はい、とおっしゃって、注文をとられます。そのあとで、私が注文書を書こうとす

ると、ちょっと待ちなさい、毛沢東政権はもうすぐ消えるから、とおっしゃるのですが、ご存知のごとく、消えるどころか、ますます勢力を伸ばしている実情をしぶしぶと、認めながらも、

「何年かあとには、これは、みんな焼却炉行きですよ、若いアメリカ人の教授陣になにが分かるか」と、これも、こっそりと私におっしゃるなど、まるで、私を身内のように親しく扱ってくださっていました。けれども毛沢東の学問知識は、きちんと認めていらっしやいました。また、日本における中国研究のレベルの高さには、いつも敬服なさっていらっしやいました。

中国関係を研究しているアメリカ人の学生たちは、京都大学へ留学するのが、ルートになっていました。そこで、中国関係の学生は、日本語を学ぶのが当然のこととして、日本語の授業に出ていました。

ハーヴァード大学という大学は、ボストンのケンブリッジ市にあり、1636年に設立されました。英国からピルグリムスが渡来した16年後にジョン・ハーヴァードという牧師が作ったもので、当時の学生数は9人。現在は、18000人を超える正規生がいます。ジョン・ハーヴァード牧師の設立というのは、学生に聞くとどうも眉唾物のようで、彼は、ただ、図書を少々寄付しただけだというのを何人からも聞きましたが、ジョン・ハーバードの立派な銅像は、大学内におかれております。

私が図書館に勤めて2年ばかり後にハーヴァードで教鞭をとられ、日本語教育の中核をなしていらっしやったライシャワー先生が、日本駐日大使として赴任されました。ライシャワー先生のお弟子さんで、すでに日本語を教えていらっしやったNIWA TAMAKO先生がライシャワー先生の後を継がれて、日本語を教えられましたがニワ先生の跡にということで、急遽私が中級の授業を途中から受け持つことになりました。ICUでの副専攻的に日本語教授法を勉強してきたのが買われたのでしょうか。また、日本語教科書作成計画があり、それに参加してもらいたいというありがたいお話でした。日本文学のヒベット教授と、板坂元先生を中心として、中級上級教科書の作成案が練られていました。それから、気の遠くなるような忙しさでした。現代日本語読本と題する教科書ですが、作られてからずいぶん時が経っていますが、日本の近代思想史的な展開を学ぶのには、今でももっと使われるべき教科書であると思います。実際にまだ、

上級の授業で使っているアメリカの大学も一つや二つではないと聞いております。

学生は、朝鮮戦争が終わり帰還した兵士たちが、政府の奨学金を得て多く入学してきました。中国関係、韓国関係のものを学ぶ学生が多かったです。やがて、学生の種類も日本の発展に伴って変化していきました。ビジネス・スクールの学生、ロー・スクールの学生、MIT大学からの技術関係の学生などは、はっきりと目的もわかりますが、空手をやっておもしろかったから、日本人混血児の母が勉強しろという、すしを食べて余りのおいしさに感動したからなど、いろいろでした。

私が教え始めたときは、ニワ先生と松田魔耶子(お茶大卒、お茶大教授)先生の書かれた初級の教科書を使いました。直接法と翻訳法を取り混ぜた、大学生用教科書としてはふさわしいものであったと思いました。やがて、その後、エリノア・ジョーデン先生の **BEGINNING JAPANESE** を初級で用い、中級、上級で、新しく出来上がったハーヴァードの **MODERN JAPANESE** を使いました。

アルフォンソ先生のお書きになった、**JAPANESE LANGUAGE PATTERNS** を参考書として、ずいぶん利用させていただきました。超上級の表現の特殊な使用法については満足できないこともありますが、上級の教科書に出てくる、文法、文型項目については殆ど網羅しており、英語で詳しい説明があります。これは、皆さんにももっと辞典のようにして使って、参考にして戴きたい書です。例文の内容がちょっと時代はずれになっているのはしかたがないとして、説明は明解で、役立つと思います。

ジョーデン先生の **B. J.** は、ずいぶん長い間使いました。しかし、どの教科書も同じことですが、使う教師は、教科書の不足分を無理なく補っていく方法を考えて、常に副教材を、学生の要求に応じて作成していくべきものだと考えます。**B. J.** だけでは、物語文的な文章力の養成はもとめられません。すべてローマ字書きですから、何とかせねばなりません。

オーディオ・リングアル法が紹介されたとき、アメリカでは、文法的説明や語彙のニュアンス、使用法などは、総て、言語学者の教師が十分に英語でおこなうものとされていました。言語学者の肩書きのない教師、助手

は、上のようなことを一切行なわず、一言にしていえば、テープレコーダーのように反復練習、それも教科書にある練習文を繰り返して、学生が日本人と同じような発音、アクセント、表情でいえるように訓練するというのが鉄則であったようです。ハーヴァードでも、ある時期、同じことをしましたが、学習者には、大変不評でした。日本語について学ぶより、日本語を使えるようにしたいのであって、文法説明は教科書を読むだけで、十分だと強い反対がありました。その後、総てを私に任すから良きに計らえというありがたいお言葉がありました。そこで、文法、説明は総て宿題でよく読んでくること、ドリルのテープも授業に出る前に繰り返してきいてくること、を条件として学生に要求いたしました。教室内でも当然ドリルも行ないましたが、それまでに学んだものを織り交ぜ、全く新しい物を学んでいる印象を作るようなドリルを作ったり、ロール・プレイなどを織り込んだ授業を行ないました。また、会話文だけですので、その内容と語彙文法点を織り込んだ物語形式のものを、文章として与え、それについての会話を行なうなど、素材は同じでも、出てくる料理の種類はいく通りにもなるのと同じで、いろいろ風変わりなものも入れました。学期末の試験はハーヴァードでは、3時間です。こちらも必死になって文章をつくりまします。学生はその文章を楽しみにして試験にでていました。

1900 何年だったか、記憶は定かではございませんが、日文の平野由紀子先生が、ご主人のハーヴァードでのご研究に同行され、何と、私の助手を努めてくださいました。B. J. の内容を文学的に高めて、B. J. の内容だけを使って、期末試験の文章を作ってください、とお願いしました。教科書の内容は、レストランで食事をしていて、肉が好きか、鶏肉のほうがいいかなどというものでした。平野先生の作られたものは、春が来て、美しい花々が咲き乱れている。木々には鳥が来て美しい声で鳴き、というようなはじまりで、春らしい美しい光景を描いたものでした。私から見れば、大変文学的な、高尚な状況描写で、ああ、私の日本語の授業に品格ができた喜んで、試験問題として取り上げました。さすがは平野先生で、私の指示(つまり、学生の習っていないものは入れないこと)はしっかりと守ってくださいました。それがです。中国文学を専攻している大学院の男子学生の答案を読んで、びっくりしました。美しい小鳥をイメージしていたのに、彼の答案は、にわとりが、慌てて木を駆け上ってけたたまし

く鳴いたというものでした。これは出題がわるかったのではありません。文学を専攻している学生とは思えない、とあきれるばかりでした！特に英語でさえ、鶏や七面鳥などの食用の鳥類を、bird と呼ぶ習慣はあるのですから、許せません。こうした楽しみは、日本語教師に与えられた特権でしょう。『苦あれば楽あり』です！

さて、長年担当させて戴いていた、夏季の日本語教育実習が今年から岡崎先生のご指導のもとに行なわれました。日本の社会の変化に伴って、学習者も当然変化してまいります。また、日本語教育の場も、大学や日本語学校などの形式でなく、もっとインフォーマルな環境での、学習者の利便さも考えた場所で、あるいは、家庭ということにもなるでしょう。教える内容も均一的なものでなく、大いにバラエティーに富んだものになるでしょうし、使うとすれば、媒介語も種種なものになるでしょう。母語の異なる学習者集団を教えることも多くなるでしょう。ということは、直接法にうんと工夫を凝らすことも必要となりましょう。こう考えていくと、日本語教授が、ますます面白さをましてくるわけです。

もっとも必要なことは、学習者を知ることです。しかし、何を求めているのですか、というのは教師が学習者に始めて聞く質問としては、愚問だと思います。というのは、何が必要か、何が後々役立つか、何があるのか、まだ知らない人に向かって、何を勉強したいですか、というのは愚問だということです。

古いといわれるかもしれませんが、先ず、教師からのプレゼンテーションがあって、それをマスターしてもらって、というプロセスを繰り返し繰り返し行なって、学習者の日本語のもち札を増やし、そのあとで、これを使って何ができますか、何をしましょうか、と聞くのが筋だと思います。全然知らない都会に着いた人に、どこを見物したいですか。は愚問でしょう。この都会には、こういうものと、こういうものがあります。どんなものが見たいですか、が順序でしょう。こうした簡単なことで、教師はよく躓きます。分かるはずだ、きっと分かるだろうは、避けるべきことです。

シチュエーショナルな教育法がふえているようですが、やはり、私は、その土台に文型練習や、文法点の整理やらを教えるべきだと思います。楽しいクラスというのは大事ですが、役に立つクラスは最も大切な要素ではないかと思います。つまり、学習者自身が積み上げをやっている土

台作りを忘れてはならないと思います。シチュエーションにはきりがなくバリエーションがあります。それを全部教えることは時間的にも不可能です。できるだけ応用範囲の広いものを教えるという注意が必要でしょう。ですから、数多く出ている日本語教材をばらばら見ていて、あ、これ面白そうやらせて見よう、的な教材の選び方は避けるべきではないかと思います。何故、この教材を選んだのか、教師はよく自身で考え、昨日のクラスと明日のクラスも考えて、どう関係づいているかを考えて、教材選びを行なうべきだと思います。

愉しく学ぶのは結構なことです。ただ、そこだけで終わるのでは困ります。愉しく学んだものを広げていけるような努力を教師は怠ってはいけないと思います。誤りを正すのは教師の当然の仕事です。完全文で答えさせるのは不自然だという批判をよく耳にしますが、初級、中級では、その段階が絶対に必要だと私はかんがえます。知っているものを、意図あって、オミットして話すのと、知らないで、オミットしたものしか話せないというのには大きな差があります。

古いねえ、というささやきが方々から聞こえるようです。でも、古い、というだけの理由で、その功も捨ててしまうのはどうかと思います。機械的な反復練習は古いからといって捨ててごらん下さい。やさしい文でも、えーと、えーと、とよく考えでからでないと、出てこないという結果は目に見えています。反復練習の功をもう一度考えてみてください。

長々とまとまりのないことをお話いたしました。もうひとつ最後に言わせて戴きたいことは、日本語教師として、やはり、きれいな品位ある日本語を使って頂きたい、ということです。これは、常日頃の努力がいります。時代の流行語も結構です。それは、スパイスとなるものでしょう。けれどもそれに流されることのないようにどうぞ、しっかりと、繰り返しますが、品位ある日本語を身につけてくださるようお願いいたします。

お茶大では、立派な先生方、立派な学生さん方、優秀な外国人留学生に囲まれて、大変楽しい日々を送らせていただきました。長い間、お世話になりました。今後も、皆様のご健康と、この研究会のますますのご発展をお祈りします。ご静聴ありがとうございました。